

# ブリコルール熊楠

## —「やりあて」とブリコラージュをめぐる—

唐澤太輔（IRCP 客員研究員）

キーワード：南方熊楠、「やりあて」、tact、レヴィ=ストロース、ブリコラージュ

### 1 はじめに

みなかたくまぐす  
南方熊楠（1867～1941年、博物学者・民俗学者・変形菌研究者）は、海外遊学（アメリカ・キューバ・イギリス）から帰国してすぐに、聖地那智山（和歌山県那智勝浦町）へいんせい隠栖した。それはよく「植物採集のためだった」などと言われる。しかし、本当のところは、14年間に渡る海外遊学にもかかわらず何の職も学位も手に入れずに帰国した南方は、家族からこの地へ厄介払いされたのである。南方は、ロンドンでは、大英博物館の書籍室へ毎日通い、古今東西の書物を漁るように読み、筆写していた。そこから一転、今度は「極東」と言われる日本の中でも特に「僻地」であった那智へ移った。知の殿堂・大英博物館から、豪昧たる熊野・那智へ<sup>(1)</sup>。この極端な移行は、南方熊楠ならではの。普通は、そのギャップに耐えられず、すぐに山を下りそうなものだが、南方は、3年間もこの地に留まった。

1901年10月～1904年10月までの3年間、南方は、那智山麓にある宿・大阪屋旅館を拠点に、生物学、深層心理学、民俗学の研究を精力的に行った。南方にとって、この3年間は、まさに「星の時間」<sup>(2)</sup>であり、これまではまったく思いつかなかったような事柄が、次々と彼の頭脳に湧出してきた。南方は、それを大急ぎで書簡に認め、友人の真言僧侶・土宜法龍（1854～1923年）へ何通も送った。この書簡群は、現在、研究者の間でも特に思想性が高いものとして珍重されている。土宜自身も、那智にいる南方から送られてきた書簡群を指して「頗ぶる至上の宝物[高山寺本：343]」と誉め讃えた。

しかし、南方による天才的なひらめきは、多くの書籍に囲まれ、最新の器具などが完備された実験室などで生まれたものではなかった。それは、那智熊野大社にほど近い宿の陋室ろうしつで誕生したのである。

小生二年来この山間におり、記憶のほか書籍としては『華嚴経』、『源氏物語』、『方丈記』、英文・仏文・伊文の小説ごときもの、随筆ごときもの数冊のほか思想に関するものとはなく、他は植物学の書のみなり。それゆえ博識がかったことは大いに止むと同時にいろいろの考察が増して来る。…(中略)…一事一物に自分の了簡がついて来る。(1903年6月30日付土宜法龍宛書簡)  
[往復書簡：274]

上記書簡を読んでもわかる通り、南方がこの那智山麓の宿に持参できたものは、非常に限られていた。そのため、ロンドン時代のように（書籍室で古今東西さまざまな貴書・珍書を書き写して）、知識を思う存分取り込むことは、当然のことながら難しかった。しかし、南方にとっては、逆にその「限定」がありがたくもあった。なぜなら、新たな情報を得ることができない代わりに、今まで蓄積してきた事柄への考察が恐ろしいほどに増したからである。南方の知は冴えわたり「一事一物に自分の了簡がついて来」たという。「了簡」とは、英語で言うと、understand（理解する、下に立って対象を見ることによって頭で理解できる）というより、むしろ perceive に近いと思われる。per-は through と同じく、入口から出口まで貫通する、つまり完全であることを表し、-ceive はつかみ取ることを表す。南方は、その一挙手一投足ですべてを一気につかみ取っていたのである。

南方は、極めて不自由な環境の中でも、この時期に、さまざまな植物・生物を発見している。中には夢による発見もあった。

## 1 「やりあて」と tact

「やりあて」——この艶めかしい響きをもつ語は、南方の造語である。それは端的に、偶然の域を超えたような発見や発明、的中のことを意味する。

実は「やりあて」（やりあてるの名詞とでも言ってよい）ということは、口筆にて伝えようにも、自分もそのことを知らぬゆえ（気がつかぬ）、何とも伝うることならぬなり。されども、伝うことならぬから、そのことなしとも、そのこと用なしともいいがたし。（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡）【往復書簡：310】

南方は「やりあて」を言語で表現することは難しいと言う。しかし、難しいからといって、それが無用かという、まったくそんなことはなく、それは確かに「ある」のだ。南方は、自身にも頻発するこの偶発的な事柄を何とか説明したいと考えていた。手元には、本当に限られた数の書籍と植物標本用の薬品しかなかった。しかし、彼はこの那智山でしばしば菌類、藻類などを「やりあて」ることができた。いや、限定された場所であったからこそ「やりあて」ることができたのだ。

金粟【南方の自称】負け惜しみうにはあらぬが、自分いろいろ植物発見などして知る。発見というは、数理を応用して、または tact にうまく行きあたりて、天地間にあるものを、あるながら、あると知るに外ならず。（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡、【 】内—筆者）【往復書簡：311】

南方は、那智山でいろいろな植物を発見したという。上記書簡を読む限り、南方はどうも「数理を

応用して」つまり客観的・科学的なデータに基づいて計画をしっかりと立てた上での発見よりも、むしろ「tact」によって発見する（「やりあて」る）ことに関心があったようだ。ここで南方が言う「tact」こそ「やりあて」という謎を解く重要な鍵となるものである。南方は「tact」に関して、以下のよう

に述べている。

この tact（何と訳してよいか知らず。石きりやが長く仕事するときは、話しながら臼の目を正しく実用あるようにきるごとし。コンパスで斗り、筋ひいてきつたりとて実用に立たぬものができる。）熟練と訳せる人あり。しかし、それでは多年ついやせし、またはなほだ精力を勞せし意に聞こゆ。（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡）【往復書簡：310】

南方は、ここで「tact」を何と訳してよいかわからないと述べている。そして、わからないが、事例なら挙げるができるということで「石切り屋」の話を持ち出している。

石切り屋は、たとえ無駄話をしながらでも、しっかりと臼の目を寸分違わず切ることができる。そこに、コンパスや定規などの器具なくてもできる。もし、それらの代わりになる物があれば、それらを代用して使うこともあるだろう。逆に、石切り屋の弟子や見習いがコンパスや定規やその他の器具を全てそろえてから石を切っても、不思議とうまくいかないのだ。南方は、別の書簡でも同じように、石切り屋と「tact」の関係を述べている。

されば数量の学識、万物に及ぼさぬ今日は tact（何と訳するか知れぬが、練熟能ともいうべきか、石切り屋がよそむきて話しながら臼の目を規則通りに角度正しく切り、何の音調の定則も譜表も持たざる芸妓が隣人のくだまく声に合わせて三線を鼓するがごときを tact という）ということ、もっとも肝心なり。東洋のことには tact まことに多し、西洋人にはこのこと少なし。

（1911年10月25日付柳田国男宛書簡）【全集8：220】

南方は、ここで再び前述した石切り屋の事例を挙げるとともに、今度は芸妓の事例も挙げている。宴席において芸妓は、隣に座った客が酔いにまかせて気持ちよく歌い出すと、それに合わせて三線をひくことができるという。当然そこには楽譜はない。芸妓は、それでも歌う客にうまく合わせて演奏できるのだ。両者とも、対象の中に潜む「本来性」とでも言うべきものをうまく取り出し行為をしている。それは、能動的にむりやり引っ張り出すのではなく、受動的に取り出す、あるいは対象 まにま 随に取り出す感じである。

石切り屋は、通常の準備・順序（石にコンパスや定規を用いて線を引いた上で切る）を省いてもうまく仕事をする。芸妓も、楽譜をそろえるという準備がなくても、器用に演奏する。つまり、彼女らは、困難な状況において通常では（素人には）考えにくいことを難なく成し遂げてしまうのである。これこそ「やりあて」の真髄である。

では、南方自身は、どのように「tact」を発揮し「やりあて」ていたのか。以下に彼自身の言葉を見ていく。

一例をいわんに、数量のことは、予期たしかなれば例までもなし、tact のことをいわん。明治二十三年、予、フロリダにありて、ピソフォラという藻を見出だす。これはそれまでは米国の北部にのみ見しものなり。さて帰朝して一昨年九月末、吉田村（和歌山の在）の聖天へまいれば、必ず件くだんの藻あると夢みること毎度なり。よりにて十月一日、右の聖天へまいりはせぬが、その辺をなんとなくあるくに、一向なし。しかるに、予の弟の出務中なる紡績会社の辺に池をほりあり。（これは小生在国のときなかりしものゆえ、小生知るはずなし。）それに黒みがかつた緑の藻少し浮かみあり。クラドフォラという藻と見えたり。それは入らぬゆえ、ほって帰らんとす。されども、何にもとらずに半日を費やせしも如何いかなれば、どんなものか、小児にでも見せて示さんと思ひ、とりて帰る。さて顕微鏡で見るに、全く夢に見しピソフォラなるのみか、自分米国で発見せしと同一種なりし。（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡）【往復書簡：311】

南方は、アメリカ遊学時に発見したピソフォラという藻の夢を、帰国後何度も見た。それは「吉田村の聖天に行けば、必ずお目当てのものが見つかる」という夢であった。目を覚ました南方は、実際にその辺りを歩き、藻を採集し持って帰ってきた。宿に帰り、顕微鏡でその藻を見ると、それはまさにピソフォラそのものであった。我々は、植物・生物採集というのは、事前にさまざまな地理を確認し、その植生を書籍等で調べ、専門的な採集道具をそろえてから行うもののだと思いがちである。しかし、南方は、わずかな手持ち道具とこれまで蓄えた知識だけで「やりあて」たのだ。

南方は、続いてもう一つ事例を挙げている。

さて、そんなら一例をまた引かんに、今度は本月五日の夜クラテレルスという菌（画にて見たることあり。実物、画よりはるかに大なるに驚く。後に画をしらぶるに縮図の由。予の一度も見しことなきところに記しおる）、那智の向山をさがせば必ずあるべしと夢みる。翌日、右の例もあるから、おかしきことに思いながら、向山をさがすになし。それから夕になり、帰途はなはだ艱苦、あるいは谷に墮つるうれの患うれいあるから、速き路をまわり、花山天皇の陵という処をこゆるとき、この菌多く見だす。これは予が見しこともなきもの、また、画をだけは見しが、どんな地に生ずるものとも、何の木の下に生ずるとも読みしことなし。今も読み得ず。（画のみにて何にもなきなり。右の大きさの付記別にあるのみ。）しからば、右ごときはtact というの外なし。（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡）【往復書簡：312】

南方は「那智の向山に行けば、必ずクラテレルスというキノコがある」と夢を見た。目を覚ました南方は、実際に向山に向かった。残念ながら、そこにはクラテレルスはなかった。しかし、その帰り

道に大量にそれを発見した。これまで南方は、そのキノコを画で見て知っていただけであった。あとは「もちあわせ」の知識だけが頼りであった。しかし、南方は見事にこの珍種を「やりあて」しているのだ。

## 2 ブリコラージュ

石切り屋も芸妓も南方も、一言で言えば、非常に「器用」である。実に「器用」に仕事を行っている。そして、そこには「偶然性」が絡んでいる。

「器用」と「偶然」、これらを考える際、筆者は、レヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss 1908～2009年) の言説を思い出さずにはいられない。彼らの仕事は、レヴィ=ストロースの言う「ブリコラージュ」*bricolage* (器用仕事) そのものなのである。そして、彼らはまさに「ブリコール」*bricoleur* (器用人) なのである。レヴィ=ストロースは、以下のように述べている。

それはフランス語でふつう「ブリコラージュ」*bricolage* (器用仕事) と呼ばれる仕事である。ブリコレ *bricoler* という動詞は、古くは球技、玉つき、狩猟、馬術に用いられ、ボールがはねかえるとか、犬が迷うとか、馬が障害物をさけて直線からそれるといのように、いずれも非本来的な偶発運動を指した。今日でもやはり、ブリコール *bricoleur* (器用人) とは、くろうととはちがって、ありあわせの道具材料を用いて自分の手でものを作る人のことをいう。[レヴィ=ストロース：22]

レヴィ=ストロースによると「ブリコラージュ」のもとになる動詞「ブリコレ」には、さまざまな意味があるが、どれも基本的に「非本来的な偶発運動」を指すという。南方の言うところの「やりあて」も、計算や予測を超えており、やはりそこには偶発性が潜んでいる。また南方も、那智山という僻地で、自分の周りには限られたものしかなく「ありあわせ」のものを用いるしかなかった。この、単純な線形の因果<sup>9)</sup>系列を超えた「偶然」が、思いもよらない幸運をもたらすという意味を原義的にもつ「ブリコレ」は「やりあて」の概念とよく似ている。

現に今の人にも *tact* というがあり。何と訳してよいか知れぬが、予は久しく顕微鏡標品を作りおるに、同じ薬品、知れきつたものを、一人がいろいろとこまかく斗<sup>はか</sup>りて調査して、よき薬品のみ用うるもたちまち敗れる。予は乱妨にて大酒などして、むちゃに調合し、その薬品の中に何が入ったか知れず、また垢だらけの手でいろいろなど、まるでむちゃなり。しかれども、久しくやっておるゆえにや、予の作りし標品は敗れず。(1903年7月18日付土宜法龍宛書簡) [往復書簡：309]

那智の宿に、標本作成用の高価な薬品はなかなか届かなかったであろう。しかし上記で、南方は、

手持ちの薬品などを「むちゃに調合」しても「よき薬品」よりも良いものができると言う。南方の手にかかると、手持ちの、あるいは残りものの薬品を調合するだけで、正規の薬品より良いものができるしまうのだ。卑近な例で言うと、冷蔵庫の残りものであっても、母の目分量で作った手料理の方が、高級レストランのフランス料理より栄養価も高く、また何倍も美味しく感じられるようなものかもしれない。

那智ごとき不便の地に久しく独居すると、見聞が至って狭く山<sup>やまおとこ</sup>獯ごとき者となるが、それと同時に考察の力が鋭くなり、したがって従来他から聴いたり書で読んだりせなんだ問題をおのずから思い浮かぶことが多い。(1914年1月「虎に関する史話と伝説(5)」)[全集1:37-38]

南方はここで、那智山に孤居していたときは、非常に不便であったが、だからこそ考察力が増したと述べている。そして彼は「他から聞いたり」新たに「書で読んだり」しなくても、「もちあわせ」を組み合わせることで、様々な問題が思い浮かび、さらにそれに答えることもできたとも言う。

また、レヴィ=ストロースは、以下のように述べている。

<sup>ブリコロール</sup>器用人は多種多様の仕事をやることができる。しかしながらエンジニアとはちがって、仕事の一つ一つについてその計画に即して考案され購入された材料や器具がなければ手を下せぬというようなことはない。彼の使う資材の世界は閉じている。そして「もちあわせ」、すなわちそのときそのとき限られた道具と材料の集合で何とかするというのがゲームの規則である。[レヴィ=ストロース:23]

南方が例にあげる石切り屋は、当然エンジニアではない。そして、予め計画を立ててコンパスや定規を用いて線をひかなくても「手を下」<sup>ブリコロール</sup>すことができる、まさに「器用人」と言える。芸妓もそうである。宴席という場に「もちあわせ」ているのは、三線とこれまでの経験知だけである。しかし、芸妓は、隣人のくだまく声に合わせてうまく三線をひくことができるのだ。

南方が、那智で「もちあわせ」ていたものは、先述したように「記憶のほか書籍とは『華嚴経』、『源氏物語』、『方丈記』、英文・仏文・伊文の小説ごときもの、随筆ごときもの数冊のほか思想に関するものとはなく、他は植物学の書のみ[往復書簡:274]であった。しかし、彼は、この限られたものの中で「何とか」しようとしていた。その結果、余計な(打算的な)知は減り、同時に「いろいろの考察が増して来[往復書簡:274]たのである。南方が、これらの書物を持ってきた目的は、当然、新種の藻類や菌類を発見するためではなかった。しかし、彼は「やりあて」ることができた。特に、南方が夢の中で行っていたことは、もちあわせ(ありあわせ)の知を見事に組み合わせ、新たな位相に到達する、まさにブリコラージュであった。

### 3 神話的思考と夢による「やりあて」

神話は、夢と密接な関係にある。両者とも現実世界ではあり得ないもの同士が結びつき、複雑に絡まり合いながらできている。南方は、神話と夢とを比較して、以下のように述べている。

しかし、実際には神話伝説の由来というものは人間の見る夢と同じで、あまりにも多様で複雑なため、古い筋道の数々に新しい筋道が重なっており、解きほぐすのは容易ではない。（「燕石考」The origin of the Swallow-Stone Myth、1903年頃）【英文論考：106】

確かに、神話と夢は類似する点が多い。神話でも夢でも、現実的に考えれば突拍子もないことがしばしば起こる。しかし、それが「思いがけぬすばらしいできばえを示すこともある[レヴィ=ストロース：22]」のだ。「思いがけぬすばらしいできばえ」は、いろいろと考えられるが、南方の場合、殊に夢による「やりあて」だと言うことができる。

ここで、先述したクラテレルスの事例について再度考えてみたい。南方は、クラテレルスという非常に珍しいキノコの夢を見た。なぜ彼がこのキノコの夢を見たのか。当然、筆者はそれを単に「欲望」の表れとは考えない。南方は、那智の宿で毎夜、キノコや粘菌、藻などを顕微鏡で観察していた。また、手持ちの数少ない植物書もよく読んでいた。そして、彼の内には、生物に関する雑多な知識が集積していった。その中でも、クラテレルスの情報は極めて少なかった（ほとんど画だけしか情報はなかった）が、それに似たキノコの植生などを南方はよく知っていたはずである。南方が「クラテレルスのような色や形をしたキノコは、大抵、夏のこのような気候のときに、このような木の下にあり……」というふうに、体系立てて考えたことはなかったとしても、そのような諸情報は、南方の内に「がらくた（「宝庫」を形成するもの）」のように積み重なっていた。それらが夢の中で絶妙に「統合」されたのである。つまり「がらくた」の構成要素が再配列されたのである。

レヴィ=ストロースは、以下のように言う。

ブリコロール

器用人の場合、その情報はいわば前もって伝えられているものであって、彼はそれをよせ集めるのである。それは商用電略コードにたとえられよう。それにはこの職業の過去の経験が圧縮してあり、これを用いれば、あらゆる新しい状況（ただしそれが過去にあったものと同類の状況であるという条件において）に対して経済的に対応できる。【レヴィ=ストロース：26】

ブリコロール

器用人・南方熊楠も、前もって諸情報を「寄せ集め」ていた。圧縮されていた過去の経験は、夢の中で解凍され、他の情報と組み合わせたり、再配列を成し遂げたのである。我々は、夢の中では、現実世界より遥かに容易に、異なる意味領域にあるもの同士の類似点を見出し結び付けることができる。類推し、比較し、結び付け、重ね合わせることで、そこに新たな意味を見出していくのである。この作用は、まさに神話的思考と同じである。レヴィ=ストロースは、神話的思考について、以下のよう

に述べている。

神話的思考も類推と比較をかさねて作業をする。ただし器用仕事の場合と同じように、その創作はつねに構成要素の新しい配列に帰する。[レヴィ=ストロース：27]

古代の器用<sup>ブリコロール</sup>人たちも、神話を生み出すとき（神話的思考を働かせるとき）「使用可能な手段が暗黙のうちにもことごとく調べ上げられるかあたまに入れられて[レヴィ=ストロース：27]」いたはずである。その結果、素晴らしい神話が「やりあて」られた（生み出された）のである。

分析的で客観的、そして整然としたロゴス的な知では「やりあて」ることはできない。そこには、両者を直観的につかみとり共通性を見出し、そして結び付ける能力が必要不可欠なのである。

#### 4 名と印

南方熊楠という人物は、この「結び付ける」能力に非常に長けていた。彼による民俗学・人類学の手法は、西洋に見られる神話・伝承と、東洋に見られるそれらとの構造の類似点を直観的につかみ取り示すというものであった。例えば、論考「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」で、西洋のシンデレラと中国の葉限<sup>しょうげん</sup>の物語の構造が同じだということに気づきそれを明示するというのは、驚くべき直観力だと唸られる。南方が常に関心を持っていたのは、このような異なる意味領域の重なり合いであり、さらには、それがどのようなプロセスを経て実際に現出するかであった。

南方は「心」と「物」とが交わる領域を「事」と呼んだ。そして、その「事」の解明には、夢の研究が役立つのではないかと考えていた。昼間に「心」に留まった事柄（記憶）が、睡眠中に反芻される際、ちょうどそこに何らかの「物」的要因が重なった場合、ある一つの夢が成立することがある。例えば、南方は「事」の事例として、以下のような夢の話をしている。

中井氏方にてお目にかかりし数日前、小生友人に一書を寄せし中に、高野山の僧徒が戸屋某というものを阮殺<sup>こうきつ</sup>したることを述べ、小生前年その子孫の家を見てむかしを忍べる等のことを書せり。さてその夜早く寝に就きしに、夢に旧友波木井九十郎というものと船にのりて、高野山を北に見て紀川を西へ下る。（これ理外なり。何となれば、高野山を南に見るにあらざれば紀川を西へ下ることはならぬ。）さて川を見るに、『和漢三才図会』に見えたる鼈<sup>げん</sup>のごときもの二つ<sup>うか</sup> 及び来たる。それより船危くしてほとんど覆<sup>くつがえ</sup>らんとす。二人の膝よりころげおつるものを見るに、みな書籍なり。と見てさむれば、夜雨軒を打ちて蕭条たり。（1893年12月21日付土宜法龍宛書簡）[往復書簡：45]

南方は、日中に書簡に記した高野山のことを睡眠中に思い出していた。ちょうどその時、外では雨が降っていた。この記憶という「心」的内容と外界の雨の音という「物」的影響とが交わりあって、



高野山を見ながら川を下る夢（「事」）になったのである。つまり「心」と「物」とが適度に交わり、この夢は紡がれたということである。しかし当然ながら、夢というものは、いつもこれほど単純なものではない。数年前の記憶が思い出されることもあるし、表面上は既に忘れてしまっている事柄を突然思い描くこともある。

那智山で南方は、自身の夢研究において「事」を知るだけでは限界があるということに気付いた。それは、那智で単なる「心」と「物」との重なり合いだけでは到底理解できない、夢を通じた「やりあて」を頻繁に経験していた南方自身が一番わかっていた。

そして、彼は「名」と「印」という、新たなエレメントについても考え始める。

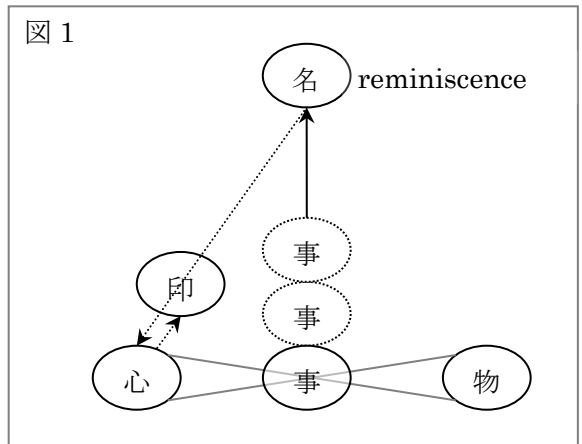
それがし 某 実は、大発明をやらかし、わが曼陀羅に名と印とを心・物・事（前年パリにありしとき申し上げたり）と同じく実在とせることにつき、はなはだしき大発明をやらかし、おもえら以為く真言の教は熊楠金粟如来によりて大復興すべし、と。よって今年中に英文につづり、英国一の科学雑誌へ科学者に向かいて戦端を開かんとするなり。（1903年6月8日付土宜法龍宛書簡）【往復書簡：271】（傍点—原文ママ）

ここで南方は、自身がこれまで考えてきた「心」「物」「事」に、新たに「名」と「印」という要素を付け加えたと興奮気味に語っている。またそれは、彼にとって「大発明」であったとも述べている。

南方によると「名」とは「物心相反応動作して事を生ず。事また力の応作によりて（1903年8月8日付土宜法龍宛書簡）【往復書簡：333】」表れるものらしい。また南方は別のところで、この「名」は、形はないが、例えば「national reminiscence」

<sup>4)</sup>のようなものだと述べている（1925年1月31日付矢吹義夫宛書簡）【全集7：15】。「national reminiscence」とは、いわば国民精神、民族精神のようなものである。同じような環境下で生きる者たちによる「事」は、次第に収斂され、類似する事柄が「名」として人々にセットされていくのである。「国民精神あるいは民族精神とは何か」と問われて、即答できる者はいないであろう。しかし我々は、その存在は、心のどこかで感じ認めているのではないだろうか。そして南方は、このような形のない「思い出」のようなものが、心に映されてイメージされたものが「印」<sup>5)</sup>であると考えていた。それは、一度心に映るという点で「心」（＝自己意識）の領域にかかわっているが、まだ「名」の名残が濃厚に表されている極めて微妙なものでもある。（図1参照）

図 1



右のごとく真言の名と印は物の名にあらずして、事が絶えながら（事は物と心とに異なり、止めば断<sup>た</sup>ゆるものなり）、胎蔵大日中に名として残るなり。これを心に映して生ずるが印なり。故に今日西洋の科学哲学等にて何とも解釈のしようなき宗旨、言語、習慣、遺伝、伝説等は、真言でこれを実在と証する、すなわち名なり。（1903年8月8日付土宜法龍宛書簡）[往復書簡：333-334]（傍点、ルビ—原文ママ）

個人的な「事」が、生成消滅しながら収斂され「名」となる。それは、まだ形を持たないものである。しかし形はなくとも、それは「国民の気風や感情を支配し左右する力はきわめて大なるもの〔全集7：16〕」でもある。これが心に映されたとき「印」となるのだ。

宗旨（宗教における教義のもとになるもの）、言語（ここでいう「言語」とは、統辞のみの極めてシンプルなものであろう）、習慣（文字にはされていないが皆に共通する暗黙のルールのようなもの）、遺伝（親子などが何となくもつ類似した性質など）、伝説（南方がここで言う「伝説」とはルビに「トラジション tradition」と振っているように、いわゆる神話のようなものではなく、因習やしきたりのようなものだと思われる）、これらを南方は全て「名」だと言う。そして、この「名」という曖昧なものが組み合わされ何らかの「形」を成すことで「印」となる。つまり、曖昧模糊とした心像（面影のようなもの）である「名」と、頭だけで理解された（概念化された）思考の間にこそ、「印」はあるのだ。

## 5 記号と印

レヴィ=ストロースは、心像と概念のあいだに「記号」があるとす[レヴィ=ストロース：24]。そして「器用人は記号を用いる[レヴィ=ストロース：26]」と述べている。

神話的思考には「プリコラージュ」が用いられるが、そうであるならば、神話的思考は「記号」を用いるということでもあると言える。この心像と概念の間である「記号」は「心像と概念の結合である[レヴィ=ストロース：26]」と定義することもできる。両者に行き渡る（浸透する）この「記号」こそが重要であり、そこに神話を深く知る鍵がある。

一方、南方の言う「名」と「心」（＝自己意識）との間にある「印」も同様の働きをする。「心」的要因と「物」的要因が重なり合うだけの単純な夢よりさらに深層には、ある種普遍的で共通性をもった夢がある。しかしそれは曖昧模糊としており、はつきりとした形もない。また、集会的無意識に近いこの領域からの力に人は突き動かされることがある。

「名」における曖昧なものが「記号」として睡眠中の「心」に映し出されたとき、映像を伴った夢となる。この統合機能を、科学哲学者のマイケル・ポランニー（Michael Polanyi 1891～1976年）であれば「暗黙の力 tacit power」<sup>(6)</sup>と呼ぶであろうし、社会学者の鶴見和子（1918～2006年）であれば「内念 endo-cept」<sup>(7)</sup>と呼ぶであろう。

「やりあて」において人は、まず「彼の「宝庫」を構成する雑多なものすべてに尋ねて、それぞれ

が何の「記号」になりうるかをつかむ[レヴィ=ストロース:24]のである。そして、それら雑多な「何か」を統合していくのである。

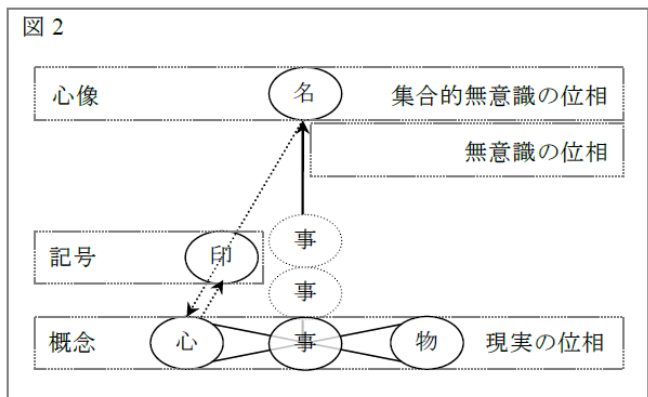
南方は、次のように言う。

事物心一切至極のところを見んには、その至極のところへ直入<sup>じきにゅう</sup>するの外なし。(1904年3月24日付土宜法龍宛書簡) [往復書簡:393]

我々が「心」と「物」が交わる「事」のさらに奥深くにある「名」や「印」を知る為には、そこへ直接入っていくしかないのである。「名」は「(アイデアの)宝庫」である。そこから「何か」を取り出し「記号」としてうまく統合できたとき、思いもよらない「神話」が生まれるのだ。「神話」の内容は、概して「やりあて」の連続である。そもそも人知を越えた思いもよらない力が働く物語が「神話」なのである。

「名」とは、レヴィ=ストロースの言う心像の領域であり、家族、国民、民族が共有する精神的なものである。それよりさらに深いところには、人類、生物レベルの心像があるのだろう。一言に「名」と言っても、そこにはユングのいう「集合的無意識」(家族的集合無意識、人類的集合無意識、生物的集合無意識)のようにさまざまなレイヤーがあるように思われる。南方が、具体的にどこまで下りていくことができたかはわからないが、それでも彼は相当深くまで「直入」できる人間だったと思われる。南方は、自身の無意識の領域に積み上げてきた雑多で膨大な情報を、夢の中でつかみ取り、組み合わせながら、日常・現実の位相へと戻ってくることができた。

「記号」(神話的思考要素)は、心像(集合的無意識)に「足をとられてはいても、すでに一般化能力をもつ[レヴィ=ストロース:27]」ものでもある。なぜなら、それはある程度の「指示能力」つまり「○○という動物は△△神の化身である」という具合に、指し示すことができるからである。だが、現実世界においては、その内容はやはり



曖昧であり、そう考えると、確かに「記号」は、心像に「足をとられている」とも言える。

南方は「心」と「物」が交わる「事」である夢のさらに奥深く、集合的無意識に極めて近い無意識の位相まで、夢を通じて辿り着いていた。そして、そこに蓄積されている情報を組み合わせ、重ね合わせることによって、彼は夢の中で「記号」を統合することができた。我々が時に見る(ある種突拍子もない)不思議な夢は、神話に似ている。それは、まさに指示能力はあるが、まだ概念にはなっていないものである。そのような夢を「原やりあて」の位相と呼んでも良い。

ここまでの内容をまとめてみよう。日常・現実の位相である場で、個人的な「事」は生じる。睡眠中の「心」的要因と「物」的要因が重なり合って生じる「事」もまだ、日常レベルで考えることが可能である。また例えば、同じような気候の下に生き、同じようなものを食し、同じような作業をしているような人々がいれば、その人たちには、類似する「事」が発生する可能性がある。それは、多少個人差がありながらも積み重なり、収斂されて「名」となる。「名」は、個人的な無意識よりも、より深い集合的無意識にかかわるものである。集合的無意識の位相では、形はないが存在する *reminiscence* とも言うべき漠然としたものが生まれる。その曖昧模糊とした心像から雑多な「記号」を組み合わせて重ね合わせ、映像化されたものが「印」である。そこには映像を伴った「神話」が生じる。一方「やりあて」において、人は、無意識深くまで潜り込み、雑多な「ありあわせ」をつかみとり、統合する。やはり最初は、まだまだ曖昧であるが、記録し、語ることを経て、それは「神話」のようにドラマ性を帯びるようになってくるのである<sup>6)</sup>。(図2参照)

## おわりに

順序立てて思考し、推論し、行為する——いや、むしろ我々はもっと直観的に動いているのではないだろうか。南方は、それを「直接到達」(1911年6月10日～18日「千里眼」『和歌山新報』) [全集6:10-11]という言葉で表している。

先述した通り、南方は「tact」について、さんざん「何と訳して良いかわからない」と歎いている。「やりあて」には「tact」が不可欠であるが、それを表す良い日本語は見当たらないのである。ただの「熟練」とも言いきれないし、「勘」のようでもあるが、それだと「やりあて」が単なるまぐれ当たりのように聞こえてしまう。

ここまで論を進めてきて、筆者なりに「tact」を定義するならば、それは「臨機応変な結合力」となる。無意識の領域にあるイメージ(それはこれまで蓄えてきた、またそのときの環境に合わせた「もちあわせ」かつアイデアの宝庫)から、自由自在に素材を選び出し結合させる力こそ「tact」なのである。その力は、「物」が過剰に溢れる中よりも、より少ない限られた状況での方が、より強力に発揮される。その力は、ロゴス的な知を遥かに超えている。「tact」は、情報を一気につかみ取り瞬時に並べ替えて配列してしまうのだ。

「やりあて」は、知的なブリコラージュである。極めて野生的ではあるが、それは「神話」のように美しい。書籍も少なく外部からの情報もほとんど入って来ないような、非常に限られた状況において、南方のブリコラージュは最大限に発揮された。彼の人生において「やりあて」が多い時期は、やはりこの那智に孤居していたときであった。彼は「もちあわせ」の数少ない書籍とのそれまで蓄えた知をもって「tact」を発揮し「やりあて」していたのである。

<参考文献>

- クロード・レヴィ=ストロース著／大橋保夫訳 1976 『野生の思考』 みすず書房（原著：Lévi-Strauss, Claude (1962), *La Pensée sauvage*, Librairie Plon: Paris)
- 鶴見和子 1992 『南方曼陀羅論』 八坂書房
- 中沢新一 2016 『熊楠の星の時間』 講談社
- マイケル・ポランニー著／佐藤敬三訳 1980 『暗黙知の次元—言語から非言語へ—』 紀伊国屋書店（原著：Polanyi, Michael (1966), *The Tacit Dimension*, University of Chicago Press: Chicago)
- 松居竜五 2016 『南方熊楠—複眼の学問構想—』 慶応大学出版
- 南方熊楠著／岩村忍・入矢義高・岡本清造監修／飯倉照平校訂 1971 『南方熊楠全集 1』 平凡社(本稿では「全集」と略記した)
- 南方熊楠著／岩村忍・入矢義高・岡本清造監修／飯倉照平校訂 1973 『南方熊楠全集 6』 平凡社
- 南方熊楠著／岩村忍・入矢義高・岡本清造監修／飯倉照平校訂 1971 『南方熊楠全集 7』 平凡社
- 南方熊楠著／岩村忍・入矢義高・岡本清造監修／飯倉照平校訂 1971 『南方熊楠全集 8』 平凡社
- 南方熊楠・土宜法龍著／飯倉照平・長谷川興蔵校訂 1990 『南方熊楠 土宜法龍 往復書簡』 八坂書房（本稿では「往復書簡」と略記した）
- 南方熊楠・土宜法龍著／奥山直司・雲藤等・神田英昭編 2010 『高山寺蔵 南方熊楠書簡—土宜法龍宛 1893-1922』 藤原書店（本稿では「高山寺本」と略記した）
- 南方熊楠著／飯倉照平監修／松居竜五・田村義也・志村真幸・中西須美・南條竹則・前島志保訳 2014 『南方熊楠 英文論考[ノーツ アンド クエリーズ]誌篇』 集英社（本稿では「英文論考」と略記した）

<註>

- 南方は、イギリスから帰国後の那智について、次のように述べている。  
熊野の天地は日本の本州にありながら和歌山などとは別天地で、蒙昧といえは蒙昧、しかしその蒙昧なるがその地の科学上きわめて尊かりし所以で、小生はそれより今に熊野に止まり、おびただしく生物学上の発見をなし申し候。(1925年1月31日付矢吹義夫宛書簡) [全集 7: 28]  
つまり、南方は人間による余計な啓蒙活動が行われないこの地には、古来の伝承や民俗がそのまま残っており、また人に踏み荒らされていない植物も多くあり、それらは、学問上極めて稀で貴重であると言うのである。
- 思想家・人類学者の中沢新一は、南方的那智隠栖期を指して「星の時間」と言う。それは、「それまで熊楠の精神の中に出現しては消えていった、無数の思考の萌芽と断片が、短期間に驚くべき密度をもって、「避雷針の先端に大気全体の電気が集中するように」一点に集積し、凝縮されて、漆黒の宇宙空間にまばゆい光を放つ星となって出現した」[中沢：4]時期であった。
- 南方は、以下のように、リニアな因果関係はわかるが（もしくは今後わかる見込みがあるが）、偶発性を孕む「縁」がわからないと言う。  
故に今日の科学、因果は分かるが（もしくは分かる見込みがあるが）、縁が分からぬ。この縁を研究するがわれわれの任なり。しかして縁は因果と因果の錯雑して生ずるものなれば、諸因果総体の一層上の因果を求むるが我々の任なり。(1903年8月8日付土宜法龍宛書簡) [往復書簡：335] (傍点—原文ママ)  
現在の自然科学は、原因→結果という関係を基本としている。それは、ロジック的な知性によって捉えることができる。つまり、順番通りに並べて整列し分析する方法である。しかし「縁」は偶然性を孕む。また「縁」は「諸因果総体の一層上の原因」にもなり得る。そのような「縁」は、非因果的の連関作用として、時として偶然の域を超えたような発見や発明・的の中などにもつながることがあるのだ。南方は、このような「縁」を知ることこそ、自分の役割だと言う。
- 比較文化学者の松居竜五は、南方による『履歴書』(1925年1月31日付矢吹義夫宛書簡)から「名」に関して、以下の言葉を見出している [松居：404-405 参照]。  
真言仏教(またユダヤの秘密教などにも)に、名号<sup>みょうごう</sup>ということを重ねず。この名号ということすこぶる珍な物で、実質なきものながら、実質を動かす力すこぶる大なり。... (中略) ...漸次にこの名号に対して信念を生ず。ついには自分に分かりもせぬこの信念のために大事件を起こす。一向徒が群集蜂起して国守武将を殺し尽

くせしごとし(越前・加賀の一向一揆の例)。(1925年1月31日付矢吹義夫宛書簡)[全集7:15]

5 南方は「印」という事柄を具体的にどのように考えていたのであろうか。それが垣間見られる文章を以下に示す。

これに似た一事を挙げんに、アフリカの仏領コンゴ国では、蟹(シカラ)を海の印号とし、虎に縁なき豹(ンゴ)を陸の印号とし、また王家の印号とす。よって豹を尊ぶこと無類で、王族ならではその皮を衣るを得ず。

(1914年1月「虎に関する史話と伝説、民俗(3)虎と人やその他の獣との関係」『太陽』20巻1号)[全集1:15]

コンゴでは、蟹を海の「印号」とし、豹を陸の「印号」とするという。さらに、豹は王家の「印号」でもあるという。つまり「印号」とは、具体的な「象徴」のことを指すようだ。人は、蟹—海、豹—陸—王家という「重ね合わせ」を行う。このような能力は、ほかの動物には見られない、ホモ・サピエンス独特のものであろう。また、イメージの重ね合わせという働きは、神話的思考につながるものである。豹と人間(王家)とをつなげる作用は、いわゆるアナロジーによるものである。両者に共通性を見出し、結び付ける能力—このメタファー的回路は、人間以外の動物には見られない。それを持つのは、現生人類だけなのである。

6 マイケル・ポランニーは「やりあて」のように、言語化できない知、言語を越えているが実在する知を「暗黙知」と呼び、対象内部の諸細目を統合する力を重視した。

この能動的形成もしくは統合こそが、知識の成立にとって欠かすことのできない偉大な暗黙の力(tacit power)なのである。[ポランニー:18]

7 鶴見和子は「やりあて」と同じく「概念 concept」化される直前の統合された知を「内念 encdo-cept」と呼んだ。そして、数学者のポアンカレの事例を挙げている。

一例を申し上げますと、岩波文庫にも入っていますけれど、ポアンカレの『科学と方法』にとってもおもしろい話があります。ポアンカレは数学者です。一生懸命考えてみても、どうしてもうまくいかない問題があった。

そのとき、急に旅行に行かなくてはならなくなった。そのころは乗り合い馬車に乗って行きましたが、馬車に足をかけた瞬間に思いついた、というのです。これが内念なのです。[鶴見:178]

8 事実、南方の「やりあて」に関する言説も、日記→書簡→論考の順に、そして時間が経つにつれてドラマチックに変遷(例えば「やりあて」た植物の本数の劇的な増加)する傾向が見られる。